島津奔る

しまづはしる

上巻

池宮彰一郎

新潮社

島津奔る（しまづはしる）

上巻

池宮彰一郎

新潮社

島津奔る（しまづはし）　上巻（じょうかん）

一九九八年一二月二五日発行

著　者　池宮彰一郎（いけみやしょういちろう）

発行者　佐藤隆信

発行所　株式会社新潮社
東京都新宿区矢来町七一
郵便番号一六二―八七一一
電話（編集部）〇三―三二六六―五四一一
（読者係）〇三―三二六六―五一一一
振替　〇〇一四〇―五―八〇八

印刷所　二光印刷株式会社

製本所　加藤製本株式会社

© Shōichirō Ikemiya 1998, Printed in Japan

ISBN4-10-387205-5　C0093

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛お送り下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

価格はカバーに表示してあります。

島津奔る 上巻

玄鳥帰 5
海峡万里 57
遠慮近憂 119
腥風崩雲 172
狼子野心 227
同床異夢 262
以火救火 312

装画　田屋幸男
装幀　新潮社装幀室

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

島津奔る

上巻

玄鳥帰（げんちょうかえる）

一

すでに朔風（さくふう）が吹きはじめていた。

数日来、低く垂れこめている凍雲はいよいよ暗く、時折みぞれまじりの時雨が風に乗って襲来する。

慶長三年（一五九八）もはや半ばを過ぎること三ヵ月、陰暦の九月初旬はちょうど太陽暦の十月初旬にあたる。大陸の東端、朝鮮半島に、荒々しい冬の気配が迫っていた。

飄々（ひょうひょう）と 凩（こがらし）が空に鳴る。枯草の靡（なび）く丘に、島津義弘（しまづよしひろ）は、城砦を背に暮れなずむ北の空を見つめて、ひとり立ち尽していた。

その丘は、三方を海に囲まれている。海に突き出た小高いあたりに、急造の城砦がある。城に到る丘はなだらかな起伏地で、不規則に地隙が走り、その地隙を覆い隠すように灌木の叢林（そうりん）と藪が散在している。

背丈に満たぬ灌木に、もう葉は散り果ててねじ曲った細い小枝は、野晒しの骨のように寒々と見える。

丘は、朝鮮半島の南海岸、多島海が陸地に深く入りこんだ峡湾の中ほどに突き出た小半島を形成している。

小半島の突端に、丘陵の地形を巧みにとり入れた新城が築かれていた。

島津義弘が、晋州城を制圧し確保するために建造した泗川新城である。

晋州は、内陸六里にある。慶尚道の都市で、農業と商業の盛んな地方経済の中心地である。晋州を通る道は、西は順天、北は星州から漢城（現ソウル）に至る交通の要衝でもある。

ために、従来、晋州防衛の一環として、北の内陸部に望津、永春、昆陽。東南四里（約十六粁）の地に泗川古城という外城が設けられていた。

慶長ノ役で出兵した島津勢は、晋州城（晋州は城壁をめぐらせた城塞都市であった）を占領すると、南の峡湾の船着場を確保するため、新城を築き、泗川新城と名付けた。

その新城の丘に、島津義弘はひとり佇んでいた。黒の頭形の兜、黒糸縅の小具足、籠手、脛当、漆黒の武装のなかで皚白の眉毛と髭が光る。それと渋茶のように日焼けした顔に炯々と鋭い眼指が厳しい。

——また、冬が来る。

故国にない厳寒を、文禄ノ役で四年間に三度、今度の慶長ノ役で三年間に二度経験した。この次の冬は六度目ということになる。

大陸の冬は、温暖な日本では想像を絶する厳しい寒さだった。戸外で不用意に肌の一部、手足

の指を曝せば忽ち凍傷にかかった。当時の衣服で暖気無しで一夜を過せば確実に凍死する。
厳寒は、戦地での過重な負担となった。防寒の備えは行動の自由を妨げ、弓矢・鉄砲の操作に事欠く。凍傷による兵の損失は予想を越える多勢に及んだ。

暮れなずむ空は、次第に紺色に染まってゆく。泗川新城の丘の、丈なす雑草を掻き分けて、義弘の姿を探す部将がいた。
部将は長寿院盛淳。義弘の謀将である。本姓は畠山氏、蒲生の地頭の家に生れ、三歳の頃から高野山で仏道を修行、長じて鹿児島に戻り、安養院という寺の住職に迎えられた。
義久・義弘兄弟は、機会あって盛淳と会い、上方の情勢を聴取した。盛淳の話は分析能力に富み、軍事能力の極めて高いことを知らしめた。
義久・義弘は、その才幹を惜しみ、請うて還俗させ、九州制覇の軍に帷幕の将として参画させた。
新城を出て半刻（約一時間）余り、長寿院盛淳は丘の上の荒地を、主君義弘を求めて探し歩いた。
――いない。どこにも見当らない。
義弘には、そういう性癖があった。常時ではないが稀に姿を消す。盛淳は九州制覇の戦の折、その性癖に悩まされた。
それは、乾坤一擲の決戦の前に限られていた。各部将に与える作戦命令や指令が錯綜するさなかである。謀将の盛淳は代って指揮をとり、その場を取り繕うのを常としたが、当惑と不安はひと通りでない。

その不在は、長くても半刻（約一時間）を越えることはなかった。暫くして姿を現わすと義弘は、明快に作戦計画の不備を指摘し、手直しを行う。

その判断は、神の如きものがあった。

盛淳は、そのふしぎな現象を問いつめたことがある。

「どげん言うたらよかかわからんが……」

義弘は、苦笑まじりで述懐した。

「戦の前に、何か気持が落着かん事があっとじゃ。不安で胸ん塞がれて、居ても立ってもおられんようになる……」

「それは、作戦の不備とか欠陥があっとでごあすか」

「そうじゃと思う……だが、いくら考えても思いつかん。焦れば焦るほど考えがひとつところを堂々めぐりしよってな……」

「それで、おひとりになって……」

義弘は、意外にも首を横に振った。

「匂いじゃよ。匂いを嗅いで廻るとじゃ」

義弘の性癖はそれであった。

——戦には、匂いがある。

戦機が迫ってくると、義弘の鼻腔にはある種の匂いが感じられるようになる。余人に説明し難い匂いだという。強いて言えば金属の灼けるに似た匂いに不快な生臭ささが交る……その匂いが強くなるほど、戦機は切迫する……。

——それと、やがて戦場となる地にも匂いがある……。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

合戦が行われる地域にも、土の匂い、草いきれの匂いの中に、えも言えぬある種の匂いが感じられるという。

戦機切迫の匂いは、不安感を助長させる不快な匂いだが、奇妙なことに戦場予定地の匂いはそう不快ではない。これは恐らく精神的なものであろう。戦機は多数の人命が鏖殺される血腥ささの予感とすれば、戦場予定地の匂いは必死懸命に生き長らえようとする生存本能のなせる業ともいえようか。

義弘は、作戦計画の不備欠陥を感じとると、ひとり戦場予定地に赴き、その匂いに浸って心気を澄ます。

それは、兵書が教える「離」である。

義弘は、その「離」を、「匂い」で感覚的に受けとめたのであろう。

――だが、それにしても時間が長い。

義弘が、泗川新城から姿を消したのは、昼過ぎである。夕暮迫るいま、すでに二刻（約四時間）は経っている。

盛淳は、足を止め、立ち尽した。

飄々と枯草が靡く。颯々と吹きわたる風は身を切るように冷たい。

と、不意に声がした。

「おう、盛淳。何をしておる」

声は、足もとからした。義弘である。

盛淳が佇んだ近くに、地隙があった。腰まで埋める草叢に遮ぎられて気付かなかったが、かな

り深くて広闊である。
その地隙から、義弘が姿を現わした。湿った土にまみれて、甲冑が汚れていた。
「あ、殿さあ……」
「その殿さあは止めろ」
地隙から登ってくる義弘は、叱るではなく言い聞かせるように淡々と言った。
「殿さあ」は「殿様」の薩摩言葉である。
「生れ落ちてから慣れ親しんだ薩摩言葉だ。一朝一夕に改まらぬのは無理ないが、下士・兵卒ならいざ知らず、将たる者がそれでは困る。よくよく心を配れ」
義弘は、滑る斜面の土に足をとられながら、草の根を掴み、重い甲冑の身を引き上げた。
薩摩言葉は、難解で知られている。境を接する肥後人でも、その意は半分も通じない。
薩・隅二ヵ国の国人は、それをかえって誇りとする一面があった。
――われら薩摩人は、他国の軟弱な人間と異なる剛強の国人である。
代々、それを言い伝えてきた。現に前領主義久は薩摩言葉で通し、いまも改めない。生涯薩摩言葉以外の言語は使わなかったことで知られている。
だが、義弘は違った考えを持った。
――薩摩人の偏狭な考えを改善しないと、将来大をなす人間は生れなくなる。
義弘は、兄義久の意を体して、十余年に及ぶ九州制覇の戦の指揮を採るうち、そういう考えに傾いた。
言語の違いに固執することは、国人の純血主義に通ずる。大袈裟に言えば民族主義である。民族（国人）を他から隔絶しようという主義は、郷土愛、郷土至上の思想に根ざすだけに強烈な活

力を持つ。薩摩の剛強はその国人意識に培われた。

だが、民族（国人）主義は、往々にして偏狭に陥る。他の国人と意思を疎通しない、受け入れない、独善になる。

九州制覇の戦に指揮を採った義弘は、その弊を痛切に思い知った。それは情報蒐集に事欠く小事から始まって、各地の領主・豪族との意思疎通が充分にできなかったことにある。

薩・隅二ヵ国の動員兵力には限りがある。広大な九州全土を制覇するには、土着の勢力を味方に組み入れることが必須の条件であった。義弘はまつろわぬそれら勢力を悉く武力で制し、従わせた。

だが、意思の疎通を欠く隷属関係は、意外なほど脆かった。二十万の大軍を擁した秀吉の天下統一軍が進攻してきた時、九州各地の領主・豪族は先を争って秀吉軍に靡き、島津を裏切った。

前領主である兄義久は、「武運拙なく」と割切って、あっさりと降伏を肯んじた。

だが、実戦の雄義弘は、異なる考えを持った。

――敗因は、単なる兵力差でもなければ、武運の所為でもない。薩摩人の偏狭が主因である。

兄義久が領主の座を退き、自らが領主となると義弘は、努めて薩摩言葉を改め、武士に共通の侍言葉を用いるよう、配下の将士に命じた。

だが、言語の改変というのは一朝一夕のものではない。おそろしく根気を要する上に、長い年月がかかる。義弘の発企した侍言葉の使用は、十年の歳月を経てもまだ緒についたばかりと言えた。

「うっかり致しました。それで殿はまた……」

盛淳は、義弘の腕を摑んで引き揚げながら問いかけた。

「近頃、かすかだが戦の匂いがするのだ。事に依ると敵の反攻が近付いておるやも知れぬ」
義弘は、盛淳と向き合って立つと尋ねた。
「だいぶ探し廻ったであろう。用向きは何だ」
「唐島から甥御様が早船でおみえになっておられまする」
「なに？　豊久が……？」
島津豊久。秀吉との和睦交渉のさなか、秀吉の弟大和大納言（やまとだいなごん）秀長の意に逆らい、毒殺されたと噂される義久・義弘の末弟家久の子である。秀吉はその償ないもあってか、豊久に家久の所領日向佐土原二万八千六百石の相続を許した。文禄ノ役以来、義弘に従って従軍し、水軍の根拠地唐島に駐屯している。年歯二十九。
盛淳は、声をひそめた。
「甥御様は、新納（にいろ）旅庵を帯同なされておられます。新納めは昨夜遅く唐島に到着、殿にお目通りを急いでおる由にござります」
「……」
義弘は、絶句した。不吉の予感に顔色が変った。
新納旅庵は、文禄ノ役に引続き、慶長ノ役にも兵を率いて出陣したが、豊臣政権との交渉事多く、義弘がその外交の才を見込み、帰国させること度々であった。この時期も薩摩領内にある秀吉直轄領の収貢米について減免を交渉中であった。
――その外交を委任した旅庵が、何で急に渡海して来たか。
「盛淳、よもやと思うたが……例の事、起ったかも知れぬな」
「……御意（ぎょい）」

義弘・盛淳の主従は瞶め合った。顔色は蒼白んでいたが、その眸子にはいかなる逆境にもめげぬ不屈の闘志が光っていた。

二

丘から海へ降る急峻の崖に、五層の広場が石塁で囲われている。泗川新城の最上層は丘の稜線から一層だけ高い。

その最上層に、戦闘指揮所を兼ねた軍議所の建家がある。堅固な丸太組みのその建家は実用本位で余分な飾りつけを用いず、造りつけの卓子に床几代りの空樽を並べた質朴そのものの部屋である。

城に戻った義弘は、豊久と旅庵をその軍議所に呼び寄せた。

第二層の宿舎の建家に待っていた豊久と旅庵は、急ぎ登ってきた。

義弘は豊久の目礼に頷いてみせると、旅庵に声を掛けた。

「旅庵、苦労をかける。息災か」

「は……御健勝の態を拝し、恐悦至極に存じまする」

豊久は月に一度、補給物資を運んでくるが、旅庵とは昨秋、義弘が帰国した際、伏見で会って以来の再会である。その旅庵はひどく思いつめた様子で、挨拶の言葉も閊えがちであった。

「辞儀はおけ。それより旅庵、その方が急に渡海してくるとは、容易ならぬ事が出来したのであろう。まずそれを聞こう」

「されば……驚き召されませぬよう。太閤殿下には先月、八月十八日、伏見城にて御他界遊ばさ

れました」

深い沈黙が部屋の中を領した。不世出の英雄の死である。その命により外征中の将士にとって、これ以上の打撃はない。

だが、前に旅庵からそれを聞いたであろう豊久はもとより、義弘と、陪席する盛淳にも、驚愕する様子は見られなかった。

「やはりそうであったか。惜しい事よ。生きてましますと頃はいろいろと批判もあった御方じゃが、亡くなられた今、顧みると、百年千年にただひとりの英雄であらせられた……」

義弘は、沈痛に哀悼の言葉を口にした。

「当夜、看取られましたのは、侍医の面々のほかは石田治部少輔殿（石田三成）ただ一人……治部少殿はその夜のうちに御遺体をかねて設えました御墓所にお移し致し、当分喪を秘めおくとのお計らいにござりましたが、当の治部少殿が即刻徳川内府殿に洩らされたのがきっかけとなり、翌日には伏見・大坂の庶民の端まで誰一人知らぬ者なき有様となり申した……」

「そうであろう。隠すより顕るるはなしじゃ。治部少の小細工が通用する筈はない」

苦笑する義弘に、豊久が口をさしはさんだ。

「不躾ではごあすが、伯父御は予期されておられたとでごあすか」

義弘の自若の態度は、それを窺わせた。

「昨年秋、最後に大坂でお目通りした際、殿下はしきりと五体の骨の痛みを訴えておられた。そのご衰弱の御様子に、死病と見てとったのよ」

今でいう骨癌であったかも知れない。秀吉の耐え難い骨の痛みは年明け早々に治まったが、その小康状態は長くは続かなかった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com